

日本中東学会ニューズレター
JAMES
NEWSLETTER
No. 95
12/19 2003

目 次

第 20 回年次大会に向けて.....	1
2003 年度第 3 回理事会報告.....	2
第 7 回日本中東学会公開講演会報告.....	4
韓国中東学会・訪問記.....	6
第 37 回北米中東学会派遣報告.....	7
「地域研究学会連絡協議会」発足.....	15
国際ワークショップ “Changing Knowledge and Authority in Islam”...16	
『日本中東学会年報』(AJAMES) 第 19-1 号刊行 および第 20-1 号投稿原稿募集のお知らせ.....	17
「日本における中東研究文献データベース(1989-2003)」 (試作版)の公開について.....	18
板垣雄三・本学会元会長、文化功労者に選ばれる.....	19
CD-ROM 版 al-Manar の刊行.....	19
寄贈図書.....	21
会費納入のお願い.....	22
事務局より.....	22

第 20 回年次大会に向けて

第 20 回年次大会事務局 福田 邦夫(明治大学)

当初、第 20 回年次大会発表申し込み期限を 2003 年 10 月末日としていたため

か、報告要旨添付を条件としていたためか、10月末段階での応募件数は15件にしかなかった。このため永田雄三先生と相談し、DMで応募締め切りの日を11月30日に延長した。

その結果、11月30日段階で、40件、12月4日段階で42件の申し込みがあり、これで申し込みを締め切ることにした。とはいえ、報告のタイトルのみの登録が5件、報告要旨の到着が今日か、明日かと待機状態。国外からの応募は3件である。

報告内容も多様であり、若い研究者からも中東、アラブ世界、イスラーム世界に関する数多くの斬新な報告要旨が寄せられており、2004年度、明治大学で開催される日本中東学会第20回年次大会は、従来に勝るとも劣らない大会になることは必至、と確信している。

* * *

日本中東学会第20回年次大会

開催日：2004年5月8日（土）、9日（日）

開催場所：明治大学駿河台キャンパス

実行委員長：永田雄三 事務局長：福田邦夫

【連絡先】

日本中東学会第20回年次大会実行委員会事務局

〒101-8301 東京都千代田区神田駿河台1-1

明治大学 福田邦夫研究室

TEL 03-3296-2292

E-mail kfukuda@kisc.meiji.ac.jp

2003年度第3回理事会報告

11月1日(土)、学術総合センタービル203会議室において2003年度第3回理事会が開催されました。概要は以下の通りです。

出席：小杉泰会長、臼杵陽、飯塚正人、大塚和夫、酒井啓子、長沢栄治、羽田正、三浦徹、湯川武の各理事、事務局より帯谷知可会員

欠席：小松久男、林佳世子の各理事

【議題】

1. AJAMES19-1号の刊行と19-2号の編集について

・19-1号が刊行された。本号から小特集を開始した。外国語率は約80%であ

った。

2．国際交流事業について

・今年度の北米中東学会年次大会（11月6～9日）への派遣は、「21世紀世界における日本の中東研究」として国際交流基金の助成に採択され、予定通り臼杵陽、大塚和夫、三浦徹、赤堀雅幸、鷹木恵子、山岸智子の各会員を派遣する。

（7頁に関連記事）

・韓国中東学会年次大会（10月17～19日）につき、本学会より小杉会長、M. Penn、岡本久美子両会員が参加した旨、小杉会長より報告があった。（6頁に関連記事）

・佐藤次高会員より提案のあった国際ワークショップ Changing Knowledge and Authority in Islam（2004年3月25～26日開催予定）につき、本学会として責任をもって組織し、国際交流基金の中東交流事業に申請を行う。（16頁に関連記事）

・三浦理事より、SSRCより要請のあった「日本の中東研究現状調査」が完了した旨報告があった。

3．日本学術会議における活動について

・「地域研究学会連絡協議会」の発足につき大塚理事より報告があった。（15頁に関連記事）

4．2004年度公開講演会について

・来年度の公開講演会のタイトルは「中東における紛争と平和構築」とし、開催地は東京、開催時期はおおむね今年度と同様とすることを決定した。

5．第20回年次大会について

・臼杵事務局長より、大会実行委員会は、発表希望申し込みの締め切り10月末日の段階で応募者が少なかったため、締め切りを1ヶ月延長し11月末日とすることを決定し、引き続き募集を行うとの報告があった。

6．「日本における中東研究文献データベース(1989-2003)」について

・三浦理事より、会員への照会調査をもとに11月初旬にデータベースが学会HPに掲載される予定との報告があった。また来年度も科研費を申請し、本事業を継続する。（18頁に関連記事）

7．会員動向

- ・本年4～10月の入会・退会者を承認した。
- ・中東協力センターの退会により賛助会員がゼロとなった。

8．その他

第7回日本中東学会公開講演会報告 「世界史のなかのイスラーム」

すでに毎年秋の恒例となっている日本中東学会公開講演会が、11月1日、東京都千代田区の一橋記念講堂で開催された。今回の講演会では、本年度から高等学校に新指導要領に基づく教科書が導入され、世界史ではイスラーム世界がヨーロッパ、東アジアと並ぶ文明圏として位置づけられたことに鑑み、世界の歴史のなかでイスラーム世界の社会・経済、文化、政治・思想が果たしてきた役割と今日的意義について、3人の講師の方々にご講演いただいた。

当日のプログラムと各講演の要旨は以下のとおり。

日時：2003年11月1日（土）13:00～17:30

会場：一橋記念講堂（学術総合センタービル内）

講演者：加藤博（一橋大学大学院経済学研究科教授）

「文明としてのイスラーム：宗教と経済」

梶屋友子（東京大学東洋文化研究所助教授）

「日本とイスラーム美術」

栗田禎子（千葉大学文学部助教授）

「帝国主義とイスラーム世界」

司会：飯塚正人（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助教授）

1. 「文明としてのイスラーム：宗教と経済」（講師：加藤博氏）

近代経済学が個人の欲望から出発するのに対し、イスラーム経済の根底には神を出発点とする考え方がある。このためもあってか、イスラーム経済はしばしば資本主義と対置されてきた。しかし「所得とは労働が生み出した価値量である」と説くイブン・ハルドゥーンの議論には、労働をもって利益の源泉と考える点でアダム＝スミスに通じるものがある。

一方、リバー（利子）の禁止も、イスラーム世界が近代において資本主義化に乗り遅れた原因としてしばしば非難の的となってきたが、グローバリゼーションの進む昨今では、巨大化し過ぎた金融資本に対する代替案として、これを肯定的にとらえる向きも現れつつある。こうした肯定的評価をもたらした原因の一つは、1990年代、グローバリゼーションの進展とともに復活してきたイスラーム金融にあるだろう。1970年代、「原理主義」的なイスラーム解釈とオイルマネーを背景に登場したイスラーム金融は、80年代には手続きが複雑化し過ぎて頭打ちになったものの、新たな解釈に基づく原理を導入することによって復活した。なお、これに関連して、財政に余裕のある商人が他の起業家の行う事業に資金を融通し、利益も損失も平等に負担するという、イスラーム勃興期に通常行われていた提携の形式には、「ニュー・エコノミー」によって広まった

リスク・キャピタルと論理的に近いところがあると言える。

2. 「日本とイスラーム美術」(講師：榊屋友子氏)

イスラーム地域の美術が日本に請来された歴史は奈良時代に遡る。唐招提寺の鑑真請来ガラス製舍利壺などは、日本に渡来した最古のイスラーム美術品のひとつである。鎌倉時代にはペルシア語の書がもたらされ、安土桃山時代には秀吉がイスラーム美術に彩られた陣羽織を着用するなどした。また江戸時代にも、出島を通じてイスラーム美術品が日本にやって来ている。一方、有田窯染付や漆製筆箱など、江戸時代以降イスラーム地域に請来された日本美術品もイスタンブールなどに残っており、美術品を介した両者の交流の歴史をうかがい知ることができる。

明治期以後は、イスラーム美術が美術展やオークションを通じて日本に紹介されるようになり、個人コレクションとともに、美術館・博物館も形成された。今日ではイスラーム地域各地で日本人研究者が発掘調査に従事しているほか、イスラーム美術史の研究会・プロジェクトなども国内で実施されているが、今後は個々の研究成果の世界への発信や海外との研究協力、また、日本国内に残るイスラーム美術品の調査・研究や最新技術の導入など、日本ならではの研究を推進していくことが期待される。

3. 「帝国主義とイスラーム世界」(講師：栗田禎子氏)

資本主義諸国にとっての市場・原料供給地・投資先として、また、その戦略的・地政学的重要性ゆえに、歴史的に中東は、列強による侵略・植民地支配を最も集中的に経験してきた地域であった。そして、イギリスによるエジプト占領が「アフリカ分割」の引き金に、また、中東をめぐる帝国主義的支配の過程で成立した「英仏協商」「英露協商」が第一次世界大戦の種を蒔く結果となったように、中東に対する帝国主義の支配はしばしば世界史を大きく転換させるきっかけともなってきた。1950～60年代には植民地支配からの解放を目指す動きが進展したが、90年代以降は、無防備になった中東に米国の帝国主義が復帰しつつあると見ることもできるだろう。

もっとも、こうした状況を「帝国主義」VS「イスラーム世界」と理解すべきなのかどうか。現実には中東は多宗教・多宗派共存の伝統を築いてきた地域であり、パレスチナ問題も本来宗教問題ではない。中東の側では、帝国主義の作り出した状況の共通性が逆に「イスラーム世界の一体性」という概念を作り出してきた側面があり、他方、帝国主義は「イスラームですべてが説明できる一枚岩の世界」「狂信的」「非合理」といった「イスラーム世界」像に基づいて侵略戦争や植民地支配を正当化してきた。その意味で、「イスラーム世界」像自体が今日なお帝国主義的環境の中で激しく争われていると見るべきだろう。

今回は特に高校教員への広報活動を強化した結果、教育現場からの参加者が著しく増加した。実際、講演後の質疑応答では、これら教員の方々を中心に、3本の講演に直接関係する質問のほか、モノを通してイスラーム史教育を行うとしたら適当な題材は何か、あるいは、パレスチナ問題が宗教問題でないという事実をどうすればわかりやすく教えられるのかといった、現場に根ざした実践的な質問が寄せられた。さらに、高校生にイスラームのイメージについてアンケートを取った場合、「束縛されて不自由なイスラーム」といった回答が多いが、この原因は「厳格な一神教」といった表現に代表される教科書記述にあるのではないかと、などの問題も提起され、各講師との間で熱心な議論が交わされた。また、参加者をお願いしたアンケートにも「高校の教員をやりつつ大学院に通っていますが、高校教員と大学の先生方との交流の重要性をつくづく感じています」新指導要領になって高校のカリキュラム全体が非常に窮屈になっている。進学校でも2単位の世界史Aを履修する高校が多く、ろくにイスラームの成立や発展のことを知らずに高校を卒業していきそうです」などのコメントが寄せられている。

なお、本年度の講演会ポスターも昨年と同じく工藤強勝さん（デザイン実験室）にデザインを依頼したが、榎屋講師の発案により同氏の講演にも登場した秀吉の陣羽織を素材に取り上げたポスターは、会場の内外ですこぶる好評であったことを付け加えておく。（企画担当 飯塚 正人）

韓国中東学会・訪問記

小杉 泰（京都大学）

10月17～19日におこなわれた韓国中東学会の年次大会を、日本中東学会を代表して訪れる機会を得た。AFMA（アジア中東学会連合）を構成する韓国、中国、日本の中東学会は、それぞれの大会の際に招待・訪問しあってきたが、今回もその交流の一環として、日本から3名の会員を招いていただいた。私のほかに、大阪から岡本久美子会員、福岡からマイケル・ペン会員がソウルを訪れた。

私自身は2回目の訪問である。前回は、1996年におこなわれた天安の檀国大学での大会の時であった。今回は、ソウル市内の韓国外国語大学での開催であった。久しぶりの訪問で非常に懐かしい思いを持ったが、韓国中東学会のメンバーの皆様との再会は本当に嬉しいものであった。長年交流を続けていると、次第に知己も増え、互いに訪問する際に見知った顔に出会うのは楽しいものである。韓国中東学会は、大会を毎年国際会議の形で開催しているが、第12回目の今年は「イラク戦争後の世界秩序における中東」がメイン・テーマであった。

分科会としては、このテーマに沿ったいくつかのパネルと、語学・文学に関連するパネルが設けられていた。私は第1部会でイスラーム世界の中道派の思想と現況について、ペン会員は第2部会で日本とイスラーム世界の関係について、岡本会員は第5部会で千夜一夜物語に関して研究発表を行なった。それぞれの報告は参加、聴講している韓国の学会員から非常に温かい反応を受けることができた。

韓国でもイラク派兵の問題があり、対米・対中東との関係をめぐって国内で熱い政治的論争が交わされているところであった。そのためもあって、イラク戦争、戦後の中東情勢とその変容、世界システムとの関わり、イスラーム政治の分析などをめぐって、この大会での議論も白熱したものとなった。会員たちの報告、発表は興味深いものが多々あり、意義深い訪問となった。

長老であるリュウ先生 (Dr. Rew Joung-Yole)、学会長のソン先生 (Dr. Sohn Joo-Young)、大会事務局長のキム先生 (Dr. Kim Dae-Sung) をはじめとして、歓迎していただいた韓国の皆様には、あらためて御礼申し上げたい。また、次期会長のチュン先生 (Dr. Chun Wan-Kyung) は今大会の実行委員長として大変お世話になったが、来年は韓国中東学会の大会は同時に AFMA 大会となることになっており、チュン先生は今から大いに張り切っているご様子であった。開催地は釜山の予定であるが、AFMA 大会は私たちにとっても自分たちの大会であるので、是非、それなりに大きな日本中東学会の訪問団を組織できればと願っている。会員の皆様にも、来年10月の AFMA 大会への参加をご検討いただければ幸いである。

なお、個人的なことであるが、ソン会長と私は、かつてエジプトに留学していた頃からの友人である。今回も旧交を温め、30年近く前の昔話に花を咲かせることができたのは、大変に嬉しいことであった。

第37回北米中東学会派遣報告

2003年の北米中東学会は、アラスカ州アンカレジで11月6～9日に開催された。冬のアンカレジの開催であったためか、参加者数700名、パネルの数87と例年より2～3割少なく、ブックフェアの出店もまばらだった。主催者は、パネルが少ない分だけお互いにゆっくり会話する時間があってよいでしょう、と語っていたが、デパートのような例年の騒々しさが無いのは確かだった。

今回の大会では、「東アジアの中東研究」「中東研究のグローバル化にむけて」のパネルが企画され、日本中東学会からの参加を要請された。学会理事会では、日本の中東研究の現状を未来にむけて総括し発信するため、上記パネルで報告を行うとともに、日米の研究者による合同パネル「Crossing Boundaries」(大塚

和夫担当)を組織することを決定した。国際交流基金中東交流事業に「21世紀世界における日本の中東研究」プログラムを申請し、派遣費用などの助成を受け、臼杵陽、大塚和夫、三浦徹、赤堀雅幸、鷹木恵子、山岸智子の6会員を派遣した。

本プログラムは、東アジア、欧米、中東の3つの地域における研究活動を結びつけた多元的な研究ネットワークを築くことを目的として掲げているが、今後も、2004年10月のアジア中東学会連合(AFMA)第5回大会(釜山、韓国)、2005年夏に予定される第2回中東学会世界大会(WOCMES)(アンマン、ヨルダン)など、さまざまな場で交流を進めていきたい。

(国際交流担当 三浦 徹)

【パネル「東アジアの中東研究」報告】

三浦 徹(お茶の水女子大学)

このパネルは、中東司書協会 Middle East Librarians Association の企画によるもので、日本、中国、韓国からはそれぞれの中東学会から代表を派遣し、これに加えて、インドネシア、オーストラリア、インドについての報告も行われ、タイトルは「東方からの眺望：東アジア・南アジア・オーストララシアにおける中東関係図書館資料」と変更された。プログラムは、下記の通り。

The View from the East: Middle East Library Collections in East, South, and Australasia

November 6, Thursday, 14:00-17:30

<Australia/New Zealand> Mahboubeh Kamalpour (Cataloguing Librarian, University of Melbourne)

<China> Cheng Hong 成紅 (Director, Library and Documentation Center , Institute of West Asian and African Studies, Chinese Academy of Social Sciences)

<India> Omar Khalidi (Librarian, Massachusetts Institute of Technology)

<Indonesia> Labibah Zain (Ph.D. Candidate, McGill University, Former Head Librarian, IAIN Sunan Kalijaga Islamic State University)

<Japan> Toru Miura (Professor, Ochanomizu University)

<Korea> Byoung Joo Hah (Professor, Pusan University of Foreign Studies)

主催者からは、各国の中東研究の歴史と資料所蔵状況を報告することが要請されていた。オーストラリアの報告では、メルボルン大学をはじめ8つの大学で中東関係の教育・研究が行われていること、これらの大学の所蔵・利用状況がアンケート調査をもとに説明された。1981年には、Australasian Middle East Studies Association (AMESA) が設立されたが、財政上の問題で2001年に活動を停止したという。中国の報告では、中国社会科学院西亚非洲研究所、北京大学

亜非研究所、西北大学中東研究所、雲南大学国際関係学院、上海国際問題研究所などの雑誌資料（中文、英文）を中心に紹介がなされた。研究の中心は現代にあり、現地語史料の収集よりは雑誌に重点が置かれている。インドについては、MIT の司書 Khalidi さんから報告があり、アラビア半島との関係の強さやハイデラバード大学、アリーガル大学などにある膨大な写本コレクションや文書史料が印象にのこった。インドネシアについては、ジョクジャカルタにある Institut Agama Islam Negeri (IAIN, 国立イスラム研究所) Sunan Kalijaga の司書をつとめていた Zain さんが報告した。インドネシアの中東・イスラーム関係の研究機関を紹介し、Sunan Kalijaga 図書館の中東関係蔵書 4,500 タイトルの 95% はアラビア語であるという。また、パレスティナ問題を中心に活動する COMES (Center for Middle East Studies) や ISMES (The Indonesian Society for Middle East Studies, Jakarta) なる組織が存在することも紹介された。韓国については、KAMES の事務局長をつとめた Hah さんが、韓国の中東研究の歴史と資料所蔵機関についての概要を説明し、最後は電子ライブラリーの動向に言及した。韓国外国語大学のアラビア語科の設立は 1965 年、中東学会の設立は 1979 年であり、JAMES より古い歴史をもっていることを改めて知った。

日本についての報告は、研究のツールとしての文献や書誌情報のデータベースに焦点をあて、とくに 2003 年秋から試験公開が始まった国立情報学研究所 NACSIS Webcat によるアラビア文字を用いた図書データベースカタログと、「日本における中東・イスラーム研究文献目録データベース」(東洋文庫ホームページ) とその補遺にあたる「日本における中東研究文献データベース 1989-2003」(日本中東学会ホームページ) の編纂作業と利用について紹介した。前者は、イスラーム地域研究プロジェクトのなかで開始されたプログラムであり、国立情報学研究所が NACSIS Webcat にアラビア文字を採用したことによって、従来所蔵機関によって使用文字や転写方法がバラバラであった書誌情報をアラビア文字に統一することで、国内資料をオンラインで一挙に検索できる道が拓かれた。米国の図書館は、早い時期から中東諸語の書誌情報は LC (Library of Congress) のラテン文字転写方式に規格化されているので、検索のうえでは支障がないだろうと思っていたが、私の報告が終わるとハーヴァード大学の司書が近づいて「すばらしい事業だ」と誉めてくれた。じつはラテン文字の転写方式でとまどうのはアラブ人自身、アラブから来た留学生なのだという。アラビア文字の転写方式は一様ではなく、国や分野によって異なった方式が存在するし、将来もひとつに統一されることはないだろう。転写についていえば、ペルシア語の方がより厄介である。今後、さまざまな国々から中東研究のために日本を訪れる学生や研究者が増えれば、研究の基本である書誌情報が転写によらず当該言語の文字で検索できることは共通のプラットフォームとして重要である。この作業に取りくまれた多くの方々に、一研究者として感謝の意を表したい。

パネルの参加者は、主催団体のメンバーを中心とする 40 名程度で、終了と同時に wonderful という賛辞が起こった。企画者であり同協会の副会長である Lesley Wilkins さん（ハーヴァード大学法学図書館）からこのプランを 2 年前に打診されたときは、研究情報収集の最前線にいる司書・ライブラリアンであるがゆえに、東アジアの中東研究の動きにいち早く反応していることに軽い感動を覚えた。今回、この MELA の昼食会に参加して米国の図書館状況取材した。彼らは、学部や大学院で図書館学と中東研究の双方を学び、中東分野を担当する専門の司書として大学などに勤務している。なぜそのような雇用が可能なのか？第 1 は大学の規模の違いで、スタンフォード大学の司書によれば中東関係だけで 1 年に 7,000 タイトルを購入するという。第 2 は、司書の職務の重要な部分が選書にあり、教員も希望リストはだすが選書は司書に任されているという。第 3 に図書館システムの違いで、ほとんどの大学は中央図書館が集中して図書の購入と管理を行っているという。日本の大学や研究機関の図書予算や蔵書数は決して少なくはない。しかし、現状では、それが、大学、さらには学部、学科、研究所に分散し、しかも同じような書目を重複して購入している。これは、キャンパスが分散しているという物理的な制約も関係しているため、一朝一夕には解決できない。そこへいま、米国流の「競争」原理が持ち込まれた。どの研究機関をとっても単独では、米国の大学に太刀打ちなど難しいし、小競り合いはロスを大きくしかねない。一瞬、暗澹たる未来がよぎった。

【パネル「中東研究のグローバル化にむけて」報告】

白杵 陽（地域研究企画交流センター）

私が参加したのは Surveying Middle East Studies: Towards a Global Perspective（11 月 7 日 8:30-10:30）と題するパネルであった。このパネルは米国の社会科学研究所評議会（SSRC）のサタネイ・シャーマー氏によって組織され、昨年マインツで開催された第 1 回中東学会世界大会（WOCMES）に続くものである。SSRC 中東・北アフリカ・プログラムによる米国、フランス、ロシア、そして日本（今回はブルガリア代表は欠席）における中東研究の現状に関するアンケート調査に基づいた報告がそれぞれの国の代表からあった。このアンケートに関しては日本中東学会でもアンケートを実施して会員の皆さんにご協力をいただいたのでご記憶に新しいと思うが、三浦徹会員がその調査結果を、具体的データを踏まえて詳細に報告した。白杵は現在、大学・研究機関を超えて進められている「地域研究コンソーシアム」の動きを補足的に説明した。

各国の報告を聞きながら、それぞれの国の中東イスラーム研究の歴史と現状を反映しているなど改めて感じた。具体的なアンケート結果では日米の類似性が興味深かった。すなわち、ディシプリンと研究対象地域に関する質問への回

答の結果が似通っているのである。いずれも歴史学とアラブ地域と回答した者がトップで全体の約3割を占めている。そして政治学・国際関係論、人類学、言語学、文学と続き、地域ではイラン、トルコの順番となる（日本ではイランとトルコと回答した研究者は8.2%で同率である）。

第二次世界大戦後に急速に発展した日米の中東イスラーム研究に比して、フランスとロシアは植民地主義的なオリエンタリズムの長い伝統を感じさせる報告であった。フランスの Randi Deuilhem (IREMAM/CNRS) は数世紀の時期的スパンをとって東洋学の遺産を紹介したが、同時にポストコロニアル期の中東イスラーム研究のあり方の難しさを浮き彫りにしたような報告だった。また、ロシアの Svetlana Kirillina (Moscow Univ.) の報告もソ連崩壊までは中央アジアというムスリム地域を国内に抱え込んでいたという事情も反映して、中東イスラーム研究のサーヴェイを行うといってもそれぞれの研究者や大学・研究機関の思惑が絡み一筋縄ではいかないことを改めて感じさせられた。

【パネル Crossing Boundaries 参加報告】

鷹木 恵子（桜美林大学）

11月8日（土）の下記のセッションに参加し、研究報告を行なった。

Saturday 11 / 8 [Session 047]

Crossing Boundaries: Gender, the Public and the Private in Contemporary Muslim Societies (Organized by Dale F. Eickelman)

Chair: Diane Singerman, American University

Discussant: Masayuki Akahori, Sophia University, Japan

Kazuo Ohtsuka, Tokyo Metropolitan University

“Shifting Boundaries of Gender and Space in Arab Societies”

Keiko Takaki, Obirin University

“Women’s Income-Generating Work at Home and the New Media: A Tunisian Case”

Tomoko Yamagishi, Meiji University

“Incongruity between ‘Official’ and ‘Public’: Iranian Laborers in Japan”

Jon W. Anderson, Catholic University of America

“Muslim Networks, and Muslim Selves in Cyberspace”

Dale F. Eickelman, Dartmouth College

“Gender and Religion in the Public and Private Sphere”

このパネルは、今年度の北米中東学会の全体テーマが Speaking Across Boundaries であるとの通知を受け、それに沿うかたちで2001年のイスラーム地域研究国際会議（於：木更津）でのセッションを、アメリカ側がD.アイケルマン氏、日本側が大塚和夫氏の取りまとめで、継続・発展させて行なったもので

ある。アイケルマン、アンダーソン両氏の共編著 *New Media in the Muslim World* が掲載論文の一部を入れ替え、装丁も新たに好評再版となったこともあり、また新鋭の国際政治学者で、エジプト・カイロで人類学的フィールドワークも行っている Diane Singerman 氏(アメリカン大学)が議長役として、赤堀雅幸氏がディスカッサントとして加わって、セッションが組まれた。同時時間帯には他に 13 ほどのセッションが並行して開催されていたが、我々のセッションには延べ 30 人程度の参加者があり、そのなかには IJMES 編集委員長の Juan Cole 氏(ミシガン大学)やまたフランスの著名なマグリブ研究者である Fanny Colonna 氏(CNRS)の姿などもみられた。研究報告は、事前の打ち合わせどおり時間厳守で進められ、報告後は、赤堀氏による公的領域における顔の見える関係性と匿名性の問題や、インターネットによる新たな公的領域の出現とともに無限の私的領域の出現などについてのコメントがあり、その後、質疑応答に入るや否や、フロアから次々と質問やコメントの手が上がり、グローバル化時代における境界の設定自体の妥当性を問う質問など、時間内には収まらないほどの活発な議論が続いたことは有難いことであった。

今回のセッションとの関わりでまた興味深く思われたことは、ニュー・メディアに関するセッションが、今回の学会だけでも複数みられたことである。筆者は、AIMS(American Institute for Maghreb Studies)の会合にも出席したが、その席でも CEMAT(Centre d'Études Maghrébines à Tunis)の前所長 Mark Tessler 氏(アリゾナ大学)が、最近、CEMAT 主催でアルジェリアのオランでニュー・メディアのシンポジウムが開催されたことを報告していた。これらのことは、ニュー・メディアがただ単なる流行のテーマであるのではないことを物語っているように思われる。中東各地では、事実、ここ数年でインターネット・カフェが急増し、また数年前までは珍しかった携帯電話が今では普通の機器にもなりつつある。ニュー・メディアが、従来の人間関係や人々の行動様式、さらにももの考え方などに大きな影響を与え、それらを部分的に変えつつあることは、他の地域でもみられることとしても、とりわけ中東地域では男女隔離や多民族、多宗教・宗派の人々が混在するなかで、それがどのようなインパクトをもつのかは、現在学である社会学や人類学でなくとも確かに興味深い研究テーマであろう。また、アメリカに 1 週間ほど滞在するなか、ニュー・メディアとの関わりでやや首を傾げたくなるようなこともあった。今年の大会は、アンカレジ・ヒルトンホテルを会場に開催されたが、この一流ホテルにおいても、30 近く受信できるテレビ・チャンネルの全てが米国の放送局のもので、衛星放送がひとつも無かったことである。これはアラスカであったからではない。昨年のニューヨークでの国際学会の折に宿泊したホテルでも同様であったことを思い出し、米国におけるテレビ報道の著しい偏りについてあらためて考えさせられた。

短い学会報告の最後になりましたが、今回の学会参加にあたり、助成を頂きました国際交流基金とその申請事務でご苦労頂きました三浦徹理事に心から御

礼を申し上げます。

<追記> この報告文を提出後、アイケルマン氏から大塚氏宛てにメールがあり、そのなかで今回のセッションについて触れられた箇所があったとの連絡がありましたので、その部分を紹介します。

.....you might be interested to know the opinion of Prof. Juan Cole, the current editor of the International Journal of Middle East Studies.
He said that it was one of the best panels that he attended at the meetings in terms of content and organization. "It was evident that a lot of work went into the session," he said. He particularly liked the fact that all participants handled themselves well, not only in presenting papers, but in clear and lively responses to the many questions from the floor. Please feel free to share this message with our colleagues in Japan.

▶▶▶第 37 回北米中東学会年次大会に参加して

赤堀 雅幸（上智大学）

大塚和夫氏と D. F. アイケルマン氏のお誘いにより、5 年ぶりに積極的な役割を持って北米中東学会に参加することができた。両氏が組織した部会については、発表者である鷹木恵子氏の報告があるので詳細は省くが、80 を上回る数の部会のなかでも、よく組織され、内容のあるものであったとの印象を得た。私個人は、気軽にディスカッサントなどを引き受けて、原稿もなくへたくそな英語で好き勝手な論評をして、はたしてどれくらいの貢献ができたものやらと心許ない限りではあるが、自身にとってはおおいに参考になり、またよい経験にもなったと思う。

例年の参加者数に比すると小ぶりの感は否めなかったが、若手の大学院生を中心に熱心な発表が見られ、北米での中東研究の動向もうかがい知ることができた。特徴的と思われたのは、今日的な問題への取り組みが非常に盛んであるのに対して、中世史や古典文学あるいは思想研究の部会が数の上でも乏しいことであり、発表者の世代によるものもあろうが、きわめて実際的で機敏な問題関心のありようを感ずる一方、学問のバランスと蓄積という点で若干の危惧が抱かれ、その点はアメリカ人類学会年次大会などと同様であった。私の最近の関心の的の一つであるスーフイズムについても、4 つの部会とその他若干の発表があったが、前近代を扱った部会は聴衆の数の点ではやや寂しいものがあった。これに対し、インターネット上のタリーカや北米のスーフイズムについて取り上げた部会はより多くの聴衆を集めたが、現状報告に近い発表が多く、理論的にはより深められる必要が大であり、現代スーフイズムの研究の不足をな

お痛感した。その他、目立った主題としてはジェンダー、民族主義、越境とディアスポラ、ニューメディア、とくにインターネット、また表象などが挙げられるだろう。いずれも、比較のおなじみとなってきており、目を奪うような主題設定とはいかないまでも、パレスティナをめぐる表象の議論など、具体的な問題設定の点では興味深い研究もいくつも見られた。

「アラスカでオーロラを見よう」の合い言葉は果たされなかったが、寒地ではあっても暖かな、雰囲気のよい大会であった。これも、大会の前から後まで獅子奮迅の活躍で、多くの煩瑣な事務手続きまで負っていただいた三浦徹氏のおかげと、心から感謝したい。

▶▶▶意外と「サムク」ない

山岸智子（明治大学）

北米中東学会 (MESA) 出席にあたって心配していたのは、「悪の枢軸」国のスタンプがベタベタと押されたパスポートを提示して入国できるのか、アラスカの酷寒をどうしのぐか、そして私たちのセッションが「さむーい」雰囲気になったらどうしようかということだった。

幸いこちらの予想を大いに裏切って、入国手続きはあっけなく終わり、アラスカは寒くなかった。建物の外に出たら指はかじかみ耳は（寒さで）痛くなるだろうと思っていたのに、全然平気。今年は例外的だそうだが、日中は気温3ほどで、ホテルのまわりの道路や建物に雪も氷もまったく見られなかった。

大会への参加者は例年より少なかったという。「ドタキャン」でつぶれるセッションは毎度あるらしいが、大会1日目に、聴衆よりパネリストの数が多いガラ空きのセッションが目に入り、自分たちもこうなってしまうのだろうかと不安な気持ちになった。

また私には、アメリカに住むイラン系研究者に対して「やりにくそうだなあ」という先入観があったのだが、今回何人かの研究者と話してみてもその先入観は払拭された。一人のイラン系研究者が「私はイエール大学でペルシア語を講じているんだが、イエール大学はわかるかね？」というので「ええ、よく知っているわ、アーガー・ブッシュの母校でしょ？」と返すと、「そうなんだよぉー」と友人と抱き合っただげさな嘆きのパフォーマンスをしてくれる。やっぱりイラン人は憎めないよなあ、と嬉しくなってしまった。

イラクをめぐるセッションはさすがに「熱かった」。発表者は遠慮なく「愚かな政策」「パカなやり方」と言って憚らず、自分たちの研究成果がまったく無視されているとフロアのMESAメンバーは大きな憤りの様子を示し、こちらが鼻白んだほどである。またビデオや写真でバグダードのいくつかの文書館の損害状況が報告されていた。

肝心の私たちのセッションはどうだったか……まずまず健闘と評価できるだろう。同時間帯にいろいろほかの魅力的なセッションが組まれていたにもかかわらず、聴衆もそこそこ来てくれて、コメントや質問も出た。全体としては新しいアカデミックな問題関心を掘り起こすことができたと思う。その場での英語の質問に的確に答えるにはもっと場数を踏まなくては、と痛感し、自分の発表の至らない点もわかり、今後の研究の糧になった。

目から鱗が落ちた、大興奮、というわけではなかったが、よい経験になり新しい発見もあった。貴重な機会を与えてくれた国際交流基金と関係各位に多謝。

「地域研究学会連絡協議会」発足

2003年7月6日に東京大学（駒場）において、日本における地域研究に従事する15の学会の代表が参加し「地域研究学会連絡協議会」が発足しました。その趣旨は、地域研究に関連する諸学会が、日本における地域研究の発展に寄与するために、相互に交流し、必要な提言を行うということです。設立の主たる目的は、おおよそ以下の通りです。

地域研究発展のために相互に連絡を取り合い、協議をおこなう、地域間比較や地球問題群に関する共同研究を推進し、地球社会の調和的発展に学術的に寄与する、日本学術会議などの組織や活動に積極的に参加し、日本の科学者コミュニティの一翼としての責務を果たす、科学研究費助成金などの競争的資金の整備・拡大その他を通して地域研究の基盤整備を推進し、次世代研究者育成のための教育体制整備に努める、地域研究に関わる海外の学会などとの交流を推進し、日本における地域研究の成果を国際的に発信することで、世界的な地域研究の発展に寄与する。

発起大会に参加したのは、次の学会です。アジア政経学会、アメリカ学会、朝鮮学会、東南アジア史学会、東方学会、日本アフリカ学会、日本イスパニア学会、日本オセアニア学会、日本カナダ学会、日本スラブ東欧学会、日本中東学会、日本ナイル・エチオピア学会、日本南アジア学会、日本ラテンアメリカ学会、ロシア東欧学会。その後、環日本海学会とラテン・アメリカ政経学会が加わり、参加学会数は現在では17になりました。

なお、幹事学会として、アメリカ学会、東南アジア史学会、日本アフリカ学会、日本カナダ学会、日本スラブ東欧学会、日本中東学会が選出され、さらにその中から事務局長としてアメリカ学会の油井大三郎東京大学教授（アメリカ学会）事務担当として加藤普章大東文化大学教授（日本カナダ学会）が選ばれました。なお、日本中東学会からは渉外担当理事の大塚が参加しております。

今後、上記の事業推進や日本学術会議への働きかけなどを積極的に行う予定

です。会員の皆様のご協力をお願いすることもあるかと思います。よろしく
お願いいたします。 (渉外担当 大塚 和夫)

国際ワークショップ “ Changing Knowledge and Authority in Islam ”

2004年3月25～26日に、日本中東学会の主催で上記の国際ワークショップを開催します。「イスラーム地域研究」の研究代表者であり、Social Science Research Council の中東研究委員会のメンバーである佐藤次高会員（早稲田大学文学部教授）から、両プロジェクトの活動を踏まえ、グローバル化したイスラームの総合的理解のために、変容するイスラームの知と宗教的権威の問題をテーマとした国際ワークショップ開催の提案がありました。これをうけ学会理事会では、実行委員会を設けて案を策定し、このほど国際交流基金に助成申請を行いました。

本ワークショップの特徴は、中世から現代まで通時代的に、中東から東アジアまで広域的に、「知と権威」のあり方を討議するところにあります。対象となる「知と権威」は、スンナ派に偏ることなく、シーア派やスーフィズムのもつネットワーク、あるいはリベラリズムや社会主義などの「西洋思想」との交流を含めて、多元的なイスラーム世界の知を相上にのせませす。概要は以下のとおりですが、プログラムが決定しだい、メーリングリストや学会ホームページでお知らせいたします。年度末になりますが、多くの方のご参加を期待しています。 (国際交流担当 三浦 徹)

* * *

Changing Knowledge and Authority in Islam

開催日：2004年3月25日（木）～26日（金）

開催場所：東京大学山上会館

主催：日本中東学会

協力：東洋文庫現代イスラーム研究班

実行委員：佐藤次高（実行委員長、早稲田大学）、三浦徹（日本中東学会国際交流担当、お茶の水女子大学）、栗田禎子（千葉大学）、酒井啓子（アジア経済研究所）、東長靖（京都大学）、松永泰行（日本大学）、Dwight REYNOLDS (SSRC 中東研究委員会、Univ. of California, Santa Barbara)

【セッションと発表予定者】(交渉中を含む)

1. Sufism and Tariqa Movements in the Era of Islamic Resurgence

東長靖 (京都大学)、小松久男 (東京大学)、Mustafa Kara (Bursa University, Turkey)、Elizabeth Sirriyeh (University of Leeds, UK)

2. Sites and Networks of Religious Authorities

Jonathan Berkey (Davidson College, USA)、佐藤紀子 (Durham University, UK)、中田考 (同志社大学)、佐藤実 (金沢大学)、Mohsen Kadivar (Tarbiat Modares University, Iran)

3. New Thinkers in Islam

Abou Elela Mady (International Center for Studies, Cairo, Egypt)、Mohamed A. Mahmoud (Tufts University, Birmingham, UK)、Ulil Abshar Abdalla (Indonesia Islam University, Jakarta, Indonesia)

『日本中東学会年報 (AJAMES)』第 19-1 号刊行 および第 20-1 号投稿原稿募集のお知らせ

11 月 12 日付けの JAMES News ですすでにお知らせしましたとおり、『日本中東学会年報 (AJAMES)』第 19-1 号が刊行されました。すでにお手元に届いているかと存じますが、今回の号は、2002 年度分会費を納付された方にお送りしました。何かの手違いで送付がなかった場合は、事務局にお問い合わせください。なお、次号の 19-2 号(2004 年 3 月刊行予定)は、2003 年度の会費を納付された方に配布することになります。

さて、本誌は、5 月の大会で報告いたしましたように、今年度から半年に一度の刊行体制 (秋と春の 2 巻) に移行しました。また、各号には原則として外国語 (英語) による小特集を組むこととなり、今回は最初の試みとして「比較史の中のアジア 所有と契約」A Comparative Perspective on Asia: Ownership and Contracts を掲載いたしました。小特集の企画は、科研費の申請条件として必要な外国語化率を引き上げるばかりでなく、日本の研究を世界に紹介し、また海外の研究者からの寄稿を促進する狙いがあります。小特集は、今後の本誌の「顔」であり、また学会活動の発展に大きな意味を持つものと考えますので、そのテーマについて会員の皆様からの積極的な提案・助言をお待ちしています。

また、最近本数が若干少なかった書評について、日本での研究成果の英語による紹介を中心にして、次号以降、内容をより充実させていきたいと考えます。書評 (従来の日本語による外国語研究書の書評なども引き続き歓迎します) の投稿をお待ちするとともに、書評すべき本についての提案や意見をお寄せください。

今回から日本の中東研究を海外に紹介するコーナー Middle Studies in Japan を設けました。今回はここ数年内に物故された会員の業績を英文で紹介する「追悼録」を掲載しましたが、残念ながら、執筆者が見つけれなかったケースが

あります。この点でも情報などありましたら編集委員会までご連絡ください。

今号の刊行にあたりましては、寄稿者の方々および査読者の方々に大変お世話になりました。この場をお借りして感謝申し上げます。

さて、現在は引き続き、来年3月の刊行に向けて第19-2号の編集作業を行なっております。同号の特集は、パレスチナ問題を取り上げることとなります。また同号には、多くの投稿をいただきまして感謝いたしておるところですが、すでに来年9月刊行予定の第20-1号の投稿希望を募る時期になっております。第20-1号の投稿原稿の締め切りは、2004年3月12日(金)とさせていただきますので、どうか積極的な投稿をよろしくお願いします。なお、投稿に当たりましては、学会HPからダウンロードできる投稿申請票の添付をお願いするとともに、どうか投稿規定をていねいに読んでいただいて(たとえば第1回の投稿では原稿に筆者名などを記入しないことなど)また形式などをよく整えて提出していただけるようお願いいたします。(編集委員長 長沢 栄治)

「日本における中東研究文献データベース(1989-2003)」(試行版) の公開について

平成15年度文部科学省科学研究費補助金(研究成果公開促進費)の助成をえて、標記のデータベース試行版を、11月11日に、次の日本中東学会ホームページに公開しました。<http://www.soc.nii.ac.jp/james/database.html>

現在公開中のデータは、本年6~8月に実施した日本中東学会の会員を対象とする業績アンケート調査に回答をいただいた方(約300名)の業績を試行版として掲載しております。データの整理には十分な注意をいたしましたが、不明・不備な点がありましたら、james@cc.ocha.ac.jpへお問い合わせください。

アンケートの回答はひきつづき受け付けております。アンケート調査は、編集室で作成したデータに訂正と追加をいただく形で実施いたしました。業績の掲載を希望される方は、回答を下記にお送りください。また調査用紙・要項の再送を希望される方はご連絡をいただければ再送いたします。

<業績送付先>

〒112-8610 東京都文京区大塚 2-1-1

お茶の水女子大学文教育学部比較歴史学コース

三浦研究室内 DB 編集係

james@cc.ocha.ac.jp TEL & FAX 03-5978-5184

本データベースについては、さらに平成16年度科学研究費補助金を申請し、会員の方々の業績とともに、非会員の方々の業績についても調査を拡充し、1989~2003年の業績を網羅できるようにしていきたいと考えております。

なお、1988年以前の文献については、下記のデータベースがホームページ上で公開されていますので、これを参照ください。

東洋文庫附置ユネスコ東アジア文化研究センター編

「日本における中東・イスラーム研究文献目録データベース」(無料)

<http://www.toyo-bunko.or.jp/ceacs/IslamME.html>

国立情報学研究所情報検索サービス(NACSIS-IR) (有料)

「中東・イスラーム研究文献索引データベース」

(東洋文庫附置ユネスコ東アジア文化研究センター)

<http://www.nii.ac.jp/ir/ir-j.html>

(三浦 徹)

板垣雄三・本学会元会長、文化功労者に選ばれる

日本中東学会第2代会長である板垣雄三・東京大学名誉教授がイスラーム・中東研究の分野で文化功労者に選ばれました。去る11月4日、東京都内のホテルにおいて文化功労者の顕彰式がとり行われたとのことです。顕彰の理由は、日本でのイスラーム・中東研究のパイオニアとして研究水準の向上に貢献したということでした。

日本中東学会とてして心よりお祝いを申し上げます。板垣先生は長期にわたり本学会会長としてその発展にご尽力いただきました。その結果、日本でも中東イスラーム研究が社会的に広く認知されるようになりました。

しかし、わが国における昨今の中東地域あるいはイスラームへの認識を考えると、板垣先生が最近出版された『イスラーム誤認』(岩波書店)というタイトルに象徴的に示されているように、必ずしも手放しで喜べるような楽観的な状況ではありません。

板垣先生の文化功労者の顕彰を機に、先生を囲んで最近の中東情勢を自由に語る場をもつことができると考えております。具体的な場所や日時に関しましてはメーリングリストなどで追って会員の皆様にお知らせする所存です。

(臼杵 陽)

CD-ROM版 al-Manar の刊行

この度、デジタル化した al-Manar 誌を CD-ROM 版の形で刊行したので、お知らせいたします。『マナール(灯台)』は、1898年から1935年まで定期刊行されたアラビア語の雑誌で、イスラーム復興の理論・思想とともに、当時の

イスラーム世界に関する非常に多くの情報を掲載したものとして、貴重な史・資料となっています。

昨年までおこなわれていた「イスラーム地域研究」プロジェクトでは、1998年に『マナール』創刊百周年として、国際シンポジウムを開催し、同誌の意義を大いに論じました。その際に、『「マナール」誌総索引』（アラビア語）を刊行しました。40年近くにわたって継続した『マナール』は約3万頁の分量があり、非常に豊かな情報源ではありますが、それだけに研究者が必要な情報を探すのも容易ではありません。そのため研究・調査上の便宜を図るのが、この『総索引』の目的でした。幸い、『総索引』は各方面から好評を博しました。

しかし、雑誌の現物なりマイクロフィッシュ版なりを所蔵しているならば、『総索引』は非常に便利な道具となりますが、実は『マナール』へのアクセスはそれほど容易ではありません。所蔵している図書館は、日本でも欧米でもそれほど多くありませんし、最近ではアラブ世界でもオフセットの複製版が手に入りません。近代におけるイスラーム思想やイスラーム世界各地に関する情報源として、『マナール』の活用を推進するためには、『マナール』自体を入手しやすいものにする必要がある—これが次の課題となりました。

そこで、1998～2003年に京都大学でおこなわれたCOEプロジェクト「アジア・アフリカにおける地域編成：原型・変容・転成」の一環として、『マナール』のデジタル化を行なう作業に着手しました。非常に保存状態のよい『マナール』のオリジナルをカイロで入手することができたのは幸運でした。デジタル化にはいくつか方法がありますが、私たちはマイクロ・フィルムに撮影してから、フィルムをスキャンする方法をとりました。スクリーン上で読むだけでなく、きれいにプリントアウトできる質を確保しようと考えたからです。ただし、上質の画像イコール大容量ということになりますので、今回のCD-ROM版では5枚組となっています。

これはCD-ROMのままドライブに入れて使うこともできますが、ハードディスクに収納して使うほうがスピードが出ます。1コマが2頁分で、それをPDFファイルに加工してありますので、雑誌をめくるようにページ順に読むことも簡単です。また、上記の総索引のデジタル版も添付されているので、検索も容易となっています。ただし、索引をクリックすると、そこから当該頁に直接ジャンプするというようにはなっていません。1万以上の索引項目と1万5千コマの画像ページをリンクさせる必要は、さすがに感じられませんでした。しかし、索引で検索したあと当該ページの数字を自分で打ち込むと、そのページにジャンプするようになっていますので、十分快適に目的の箇所にとどりつけます。

CD-ROM版『マナール』は、科学研究費によって作成されましたので、無料で研究者に提供しております。ご希望の会員の方は、manar@asafas.kyoto-u.ac.jpまで、お名前・送付先ご住所を明記したメールに「マナール希望」という題名

をつけて、お送りください。なお、日本中東学会の会員以外の方でも差上げますが、その場合は、お名前・ご住所のほか、ご所属および関心領域について、お書きいただければ幸いです。 (小杉 泰)

学会への入会希望者がおられましたら、事務局までご連絡ください。入会案内と申込書をお送りいたします。また、学会ホームページに、学会概要と入会申し込み要項が掲載されていますので、こちらをご利用いただくと便利です。

寄贈図書

【単行本】

青柳かおる『現代に生きるイスラームの婚姻論 ガザリーの「婚姻作法の書」注・解説』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、2003.

黒田卓・高倉浩樹・塩谷昌史編『中央ユーラシアにおける民族文化と歴史像』(東北アジア研究センター叢書第13号)東北大学東北アジア研究センター、2003.

【逐次刊行物】

『国立民族学博物館研究報告』28巻2号、国立民族学博物館、2003.

『関西アラブ・イスラム研究』第3号、関西アラブ研究会、2003.

Bulletin of the School of Oriental and African Studies, Vol. 66, Part 1-3, London: Cambridge University Press, 2003.

Emigración Latinoamericana: Comparación Interregional entre América del Norte, Europa y Japón (JCAS Symposium Series No. 19), Osaka: The Japan Center for Area Studies, National Museum of Ethnology, 2003.

Vich, V., “Borrachos de amor”: las luchas por la ciudadanía en el cancionero popular Peruano (“Hurt by Love”: The Struggle for Citizenship in Peruvian Popular Songs (JCAS Occasional Paper, No. 15; JCAS-IEP Series VI), Osaka: The Japan Center for Area Studies, National Museum of Ethnology, 2003.

Newsletter, No. 61, Istanbul: O. I. C. Research Center for Islamic History, Art and Culture, 2003.

Yemen Update, No. 45, Yemen: American Institute for Yemeni Studies, 2003.

会費納入のお願い

本会は会費前納制をとっております。2004年度分の会費を未納の方は、本ニューズレターに郵便振替払込用紙が同封されていますので、どうぞご利用ください。2003年度以前の会費を未納の方は、ぜひお早めにお支払ってください。払込確認後、当該号のAJAMESをお送りいたします。

事務局より

AJAMES の送付について

AJAMES は第 18 号より質・量の向上をめざして 2 分冊となりました。これに関連して、会員の皆様への送付については原則として次のようになりました。1 年度中の 1 分冊め(秋号)は前年度分の会費納入者に送付され、2 分冊め(春号)は当該年度分の会費納入者に送付されます。今年度の例をとりますと、19-1 号は 2002 年度の会費を納入済みの方に、19-2 号は 2003 年度の会費を納入済みの方に送付されることとなります。AJAMES を遅滞なくお受け取りいただくためにも、ぜひお早めの会費納入を重ねてお願いいたします。

・事務局の業務は 10 月より森尚子さんに担当してもらうことになりました。どうぞよろしく願いいたします。

・過ぎゆくこうとしている 2003 年という年は中東研究者にとっては忘れられない年になることでしょう。3 月 20 日に英米軍がイラクを攻撃し、サッダーム・フセイン政権が崩壊したからです。しかし、イラクではまだ「戦争」が続いています。日本人外交官も犠牲になりました。また、パレスティナでもシャロン首相が再選され、ハマース幹部の暗殺などの鉄拳政策をとり、隔離壁の建設も強行しています。中東研究者として考えなければならないことが山積みですが、新しい年に希望を託したいものです。

会員の皆様、どうぞよいお年をお迎えください。

(白杵 陽)

日本中東学会ニュースレター 第95号

発行日 2003年12月19日

発行所 日本中東学会事務局

印刷所 中西印刷

日本中東学会事務局

〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園 10-1

国立民族学博物館

地域研究企画交流センター気付

TEL & FAX 06-6878-8367

Eメール：james@idc.minpaku.ac.jp

<http://www.soc.nii.ac.jp/james/index.html>

郵便振替口座：00140-0-161096

銀行口座：三井住友銀行渋谷支店

普通 No. 5346808